

Se, Seo, Ðætからの出発

——定冠詞・指示代名詞・関係代名詞——
——英語の語源と由来——

菅 沼 惇

目 次

はじめに

1. 現代英語での現状
2. 出発点——OE期での概況
3. 三つの流れ
 1. 定冠詞の流れ
 2. 関係代名詞の流れ
 1. OEでの出発——源流
 2. MEでの流れ
 1. 本流
 2. 新流
 3. 指示代名詞の流れ
4. 指示代名詞二種
 1. this と that
 2. these と those

おわりに

引用文献

参照文献

はじめに

発達とは、大体、発展のことである——末広がりの、又より微細な、より複雑多岐の。そして英語もその一面——他言語には見られぬ凄まじい発展——ももつ。だか又発達にはマイナスの発達もある——英語は又ある面

では、他の諸言語に見られぬ、あられもない発達をなした言語である。

今回はその後者の種類での、又、その語源と由来の一小英語史の物語が展開することになる。

1. 現代英語での現状

現代英語、或いは何か特異現象は抜きにしておけば近代英語も一緒にしておいてよいことだが、での定冠詞・関係代名詞・指示代名詞の使用例——次章以後のOE期・ME期での状況とよく比較・対照ができて、理解がしやすいように、聖書中心の用例をなるべく引くように努める——を先ず挙げて置く。

1.1 定冠詞

- (1) a . and sent out a raven : the raven flew then out and¹⁾
GEN. VIII-7
- b . The woman conceived and bore a son, and¹⁾ and led the
 child thereon, *EXOD. II-2-3*
- c . The earth truly was empty, *GEN. I-2*

1.2 関係代名詞

- (2) a . and there took a Canaanitish woman, who was named
 Suah. *GEN. XXXVIII-2*
- b . ---tree, yielding fruit after its kind, whose seed is in itself,
GEN. I-11
- c . Cain took his wife, by whom he got Enoch. *GEN. IV-17*
- d . God saw every thing that he had made : *GEN. I-31*
- e . on the 7th day God ended his work, which he had made :
GEN. II-2

以上のように関係代名詞は、who, whose, whom, which ; thatである。

注1) このように、又以下断らないかぎり、Mod E 訳は筆者によるできるだけ他の原典に合うように心がけての直訳的試訳であること。

1.3 指示代名詞

- (3) a. This is now a bone of my bones, *GEN. II*₋₂₃
- b. This man the Lord gave to me. *GEN. IV*₋₁
- c. These are Noah's generations. *GEN. VI*₋₉
- d. Count these stars, if thou canst : *GEN. XV*₋₅
- (4) a. What is that (flower) over there ?
- b. These (books) are mine ; those (books) are yours.

2. 出発点——OE期での概況

現代英語の原点である古期英語においては、先ず簡単に述べておくと、定冠詞も指示代名詞も関係代名詞も、全てse, seo, þæt等の指示代名詞が、その三機能の役目を果していた。先ずその性・数・格での形態変化の表を示して置く。

表 1

数 性 格	sgl.			pl.
	m	f.	n.	全性
nom	se	seo	þæt	þa
acc	þone	þa	þæt	þa
gen	þæs	þære	þæs	þæra
dat	þæm	þære	þæm	þæm

実際の使用例はそれぞれ関係箇所を示す。それらが後世どのような変遷をなすか見ものである。

3. 三つの流れ

3.1 定冠詞の流れ

3.1.1 古期英語での出発

表1の各語が各名詞の性・数及び文中での格に従っての当然の形態が選ばれて使われたのである。次のような例である。

- (5)²⁾ a. γ asende ut ænne hremn:se hremn fleah ða ut γ ...GEN.VIII-₇
 b. Seo geeacnode γ cende sunu, γ ... γ lede þæt cild þæron,
 EXOD. II -_{2~3}
 c. Seo eorðe soðlice wæs idel γ æmti, GEN. I -₂

先ずこの(5 a)では、あのE.A.Poeの「大鴉」(The Raven)を思い出させる、男性名詞 hremn (又はhræfn——この方が Mod E そっくりである)には se が冠している。その前の ænne hremn の ænne は、数詞(乃至は不定冠詞) an が対格屈折したものである。(5 b)の þæt cild は中性名詞 cild の対格に付いた場合で、(5 c) Seo eorðe は女性名詞 eorðe の主格形に付いた場合である。

- (6) a. On ðam oðrum monðe, on ðone seofonteoðan dæg ðæs monðes, ...GEN. VII-₁₁
 (= In the second month, on the seventeenth day of the month, ...)
 b. of ðæra treowa wæstmæ ðe synd on Paradisum we etað;
 GEN. III -₂
 (= of the trees' fruit that are in Paradise we eat;)

ここでは(6 a)の現代英語そっくりの monð も dæg も共に男性名詞であり、前置詞 on は与格又対格支配なので、定冠詞は前者に ðam, 後者は ðone が置かれており、属格の男性名詞 monðes には ðæs が冠している。(6 b)の treowa は属格複数形なので定冠詞もそれに合わせて ðæra となったものである。

以上の通り OE 期では性・数・格にそれぞれ合わせた、本当に色々大変な姿をした定冠詞だったのである。

3.1.2 中期英語での動揺

そのような多種多様な姿で始まっていた定冠詞が、英語の混乱期である

注2) 現代語訳は、以下、付記していない場合は、現代英語の章に既出のものである。

γ は and の簡易文字。尚 OE でも and 又は ond であった。

点線は、以下、断らない限り、筆者による便宜上の省略を示している。

中期英語期には, se, seo というs系の語が段々と現れなくなって行き, 大勢を占めていた þ-系の語も非常に単純化された þeが統一的に使われるようになるが, 更にその後, その古字 þが新綴字 th に代り, the が使われるようになって行ったのである。この期におけるそれらの例を挙げよう。

先ず, 英語の実物そのものの姿に余りにもよく違いが出ていて, 英語史上 OE と ME の境い目だとされている辺りから——*Anglo-Saxon Chronicle*の最終部分 (別称 *Peterborough Chronicle*) から——二例挙げる。

(7) a. 7 se kyng hit him iætte. --- (3行省略) --- 7 swa he ferde mid þe cyng to Wincestre. MILLESIMO. C. XXVII, ll. 19~15 (底から)

(=And the king granted it to him.---. And so he went with the king to Winchester.)

b. Ða com Henri abbot. 7 unreide þe muneces of Burch to þe king. MILLESIMO. C. XXXII. ll. 1~2 (=Then came Abbot Henry. And accused the monks of the city to the king.)

この(7a)では古英語の se kyng と中英語の þe cyng が混在している有様である。又(7b)では複数名詞の muneces (=monks) の冠詞にまで, もう þe が使われている。

そして, その後はこの þe が the 綴りとなって行く。それらの例を先の OE版聖書の対応箇所 で Wycliffite 版から示してみよう。

(8) a. and sente out a crowe, the which zede out, and --- GEN. VIII-7 (但し前版)

b. ---, which conseyuede, and childide a son. And ---. And ---, and puttide the zong child with ynne, EXOD. II -2~3 (後版)

c. Forsothe the erthe was idel and voide, GEN. I -2 (後版)

(9) a. In the sixe hundrid zear of the lijf of Noe, in the secunde moneth, in the sevententhe dai of the moneth, --- GEN. VII-11 (後版)

- b. Of the fruyt of trees³⁾ that ben in paradis we eten ; *GEN.*
 III-2 (前版)

尚その他のことで、結果的には統語論上のことにもなるが、音韻論上の作因によって、この定冠詞 *the* が異形態を生み出している場合がある。次例のようなものである。

- (10⁴⁾ a. And wel we weren esed atte beste. l. 29

(=And we were well eased at the best.)

- b. But trewely to tellen, atte laste, /He was in chirche a noble ecclesiaste. ll. 707~8 (=But to tell truly, at the last, he was a noble preacher.)

ことばというものが同化・吸収の現象の過程を見せている興味深い例である。

3.1.3 近代英語期以降で

先ず、近代英語期でもその *the* がそのまま受継がれてきた。従ってそれらが現実文でどのように使われていたかの用例はここではもう割愛するが、形態上一寸珍しい例を挙げておこう。

- (11) And out of ȝ ground the LORD God formed every beast of the field, *GEN.* II-19

この奇形 ' ȝ ' は、ME迄の形態の *pe* の *p* と *y* が混同されて起ってきたと言われている。

3.2 関係代名詞の流れ

3.2.1 OEでの出発——源流

関係代名詞の出発も、表1のそれぞれの語が、それぞれの先行詞の性・数に呼応して、又それ自身は自身で、その節中での関係による格を得て、使われていたのである。又不変化辞 '*pe*' も関係代名詞として使われた。

注3) これは前版、後版ともに定冠詞を使用していないが、もし付けるとすると *the* となる筈である。

4) 拙論 (1993b) 「Chaucerの言語研究——The Prologue——英語の史的発達——」(香川大学教育学部研究報告 第1部 第88号) III 1に所載。

- (12) a . Be Sellan he gestrynde Tubalcain, se wæs ægðer ge goldsmið ge irensmið, *GEN. IV*₋₂₂ (= By Zillah he got Tubal-Cain, who was either a goldsmith or an ironsmith.)
- b . 7 nam ðær an Chananeisc wif, seo wæs genemned Sue. *GEN. XXXVIII*₋₂
- c . Wilt ðu þæt ic ga 7 clipie þe an Ebreisc wif þæt þis child fedan mæge ? *EXOD. II*₋₇ (=Doest thou wish that I go and call to thee a Hebrew woman that may feed this child ?)

これらが、先ず、先行詞に合わせて——wifが、自然性に従った場合と、文法性（中性）に従った場合と、二通りに使われていて面白い——男性・女性・中性の関係代名詞が使われている例である。

- (13) a . Seo cende him sunu, þone he genemde Gerson, *EXOD. II*₋₂₂
(=The woman bore him a son, whom he named Gershon :)
- b . treow wæstm wyrcente æfter his cynne, ðæs sæd sy on him syluum. *GEN. I*₋₁₁
- c . Cain nam wif be ðære he gestrynde Enoch. *GEN. IV*₋₁₇
- d . Abraham sealde Isaace eal þæt he ahte. *GEN. XXV*₋₅
(=Abraham gave Isaac all that he owned)
- e . God ða gefylde on ðone seofodan dæg his weorc ðe he worhte. *GEN. II*₋₂

こゝでは男性名詞 sunu を先行詞とする、関係代名詞の対格単数 þone や、男/中性名詞 wæstm を受ける属格関係代名詞 ‘ðæs’ や、前置詞付きの関係代名詞与格単数女性の ‘ðære’ や、中性の対格単数 ‘þæt’ , 及び不変化辞 ‘ðe’ が使われている。

- (14) a . God 7 totwæmde ða wæteru, ða wæron under ðære fæstnysse, fram ðam ðe wæron bufan ðære fæstnysse: *GEN. I*₋₇ (= God 7 and divided the waters, which were under the firmament, from those that were above the firmament:)

- b. 7 he asent ðeoda ofer eow of feorwegum, ðæra spræca ge ne cunnon. *DEUT.* XXVIII₋₄₉ (= And he shall send a nation over you from far away, whose speach you do not know)

これは (14a) の方が、複数名詞を先行詞とする主格複数関係代名詞の ‘pa’ と、与格複数の指示代名詞を先行詞とする不変化辞の関係代名詞 ‘pe’ の使用例であり、(14b) の方は、女性名詞 *ðeoda* (国民、人々) を先行詞とする属格複数の関係代名詞 ‘ðæra’ の例である。

英語の関係代名詞は、先ず、このような使われ方をその源流としたのだった。

3.2.2 MEでの流れ

3.2.2.1 本流

上の OE 期の諸例に対応する箇所がどうなったのか、ME 期での例を Wycliffite 版の聖書で見よう。

- (15) a.⁵⁾ Sella gate Tubalcaym, that was an hamer smyth, and a smyth into alle werkis of bras and of yrun; *GEN.* IV₋₂₂ (前版)
- b.⁶⁾ and he took ther a womman of Canaan, that was named Sue, *GEN.* XXXVIII₋₂
- c. Wolt thou that Y go, and clepe to thee an Ebrew womman, that may nurische the yong child? *EXOD.* II₋₇ (後版)

- (16) a. sche childide⁷⁾ an other sone, whom he clepide Eliezer,

注5) 用例文の意味は、以下、対応する OE 版用例か Mod E 版用例をみよ。

6) Wycliffite 版が、両版ともに、関係詞節を使わずに of 句表現をとっているのも、これは筆者による ME 試訳——もっと古典語の Latin 作文等も、学生の時には練習させられたのだから、いや OE 作文とか ME 作文はなかったようだが、それ位の知的サーカスはよいだろう——である。OE (前頁 (12b)) に原典ミスを発見したが、そのことについては又稿を改めよう。

7) この語は面白そうな語だ。筆者は学生の時、西洋哲学史を講じる西歐人牧師の「爆弾する」という言葉をこれで連想していた。この *childide* も造語だったのだろうか？ ME 辞書には OHG と注記がある。OE になし、Mod G, Mod E になし。Fr 版では *enfant* としている。尚 (16c) では当り前の *bare* である。

EXOD II₋₂₂ (後版)

b. ...tre makynge fruyt bi his kynde, whos seed be in it silf...

GEN. I₋₁₁ (後版)

c. Caym knewe his wijf, the which⁸⁾ conseyuede, and bare
Enok : GEN. IV₋₁₇ (前版)

d. Abraham 3aue alle that he had to Ysaac ; GEN. XXV₋₅ (後版)

(17) a. God ..., and departide the wattris that weren vndur the
firmament fro these wattris that weren on the firmament;
GEN. I₋₇ (後版)

b. 1. The Lord shal brynge vpon thee a folk from aferre, ...,
whos tonge thow mayst not vnderstond; DEUT. XXVIII₋₄₉
(前版)

2. The Lord schal brynge on thee a folk fro fer place, ...,
of which folc thou maist not vnderstonde the language ;
同上 (後版)

以上の通りに、OE 期の用例と個々に対比したらよく判る通りに、se も seo も þone も þæt も þa も全て、ME 期の例では ‘that’ になってしまっているか、又は OE では、そのような場合には使われていなかった、新顔の関係代名詞である whom, whos, the which が現れている——ワッ！大変なことだ！という喜びの声が起れば、もうこっちのものだ、読者の皆さん！学問の深い喜びを汲み取って下さい。

その新顔のものは又少し間を置いてから述べることとして、この本来の——これは必ずや、OE 中性代名詞の ‘þæt’ がそうになってきたのであろうという類推が十分に効きそうな恰好のものである——関係代名詞 that は、その形態に落ち着くまでには、þe とか þet とか þat と色々な形をしていたのである。

注 8) 後版では the を付けずに which のみ。

- (18) a. 7 cursede alle þe men þe mid him heoldon. *l.* 19,
MILLESIMO. C. XL. *Anglo-Saxon Chronicle*. (=and cursed
all the men who held with him ;)
- b. 7 fand þe munekes 7 te gestes al þat heom behoued. *l.*
45, MILLESIMO. C. XXXVII. *A-S Chron.* (=and found
the monks and the guests all that behoued them.)

それらは全て *A-S Chronicle* からの例であるが、(18 a) では定冠詞も *þe* だし関係代名詞も *þe* で、両者が相並んで環境を成している。そういうこともあって段々と *þe* も *þat* や *that* に統一されて行ったのであろうし、一方 *þe* の方が定冠詞へとまとまって行ったのであろう。

3.2.2.2 新流

この、関係代名詞の新流へ入る前に一寸人間言語⁹⁾、いや印欧語族の言語におけるその流れを一瞥しておこう。ここではドイツ語・古英語のように、元来指示代名詞である語を関係代名詞として使っている言語と、フランス語・ラテン語のように、元来疑問代名詞であった語を関係代名詞として使っている言語がある。例を、なるべく ME・OE 挙例の各対応箇所ですらげよう¹⁰⁾。

(19) ドイツ語での例

- a. Zilla aber gebar auch, nämlich den Tubal-Kain ; von dem
sind hergekommen alle Erz-und Eisenschmiede. *GEN. IV-22*
- b. Und Juda sah dort die Tochter eines Kanaaniters, der hieß
Schua, *GEN. XXXVIII-2*
- c. Kain erkannte sein Weib ; die ward schwanger und gebar
den Henoah. *GEN. IV-17*
- d. Der Herr wird ein Volk über dich schicken von ferne, ein

注9) これも研究してみると面白いだろう。今後の為にここにビーコンとしておく。日本語には関係代名詞は無かったと言われているが、さあ今ではどうだろうか？日本語の関係代名詞で Ph. D を取った人がいるとか？

10) 従って各意味は、Mod E 例等を参考にできるようになっている。

Volk, dessen Sprache du nicht verstehst, *DEUT.* XXVIII-49

(20) フランス語での例

- a. Tsilla, de son côté, enfanta Tubal-Cain, qui forgeait tous les instruments d'airain et de fer. *GEN.* 4-22
- b. Elle enfanta un filis, qu'il appela du nom de Guerschom, *EXOD.* II-22
- c. Et Dieu fit l'étendue, et il sépara les eaux qui sont au-dessous l'étendue d'avec les eaux qui sont au-dessus de l'étendue. *La Genèse* I-7

(21) ラテン語（ここでは俗ラテン）での例

- a. Sella quoque genuit Tubalcain, qui fuit malleator et faber in cuncta opera æris et ferri *GEN.* IV-22
- b. Quæ peperit ei filium, quem uocauit Gersam, *EXOD.* II-22
- c. Cognouit autem Cain uxorem suam, quæ concepit et peperit Henoch ; *GEN.* IV-17
- d. Et fecit Deus Firmamentum, divisitque aquas quæ erant sub firmamento ab his quæ erant super firmamentum. *GEN.* I-7
- e. Adducet Dominus super te gentem de longinquo : cuius linguam intelligere non possis : *DEUT.* XXVIII-49

以上が独・仏・羅の各言語での関係代名詞の使用例を、古英語・中英語・現代英語での各挙例との各対応例で出したものである。ことばの研究の面白味が伝わってくるだろう——賑やかな、ことば、言葉、ことばの陳列である。

そしてもう一つの言葉の性質——疑問詞は、これらの諸言語でどんな語なのかを、今度はなるべく短文でさりりと見ておこう¹¹⁾。

注 11) 各言語での例 (a,b,c) の意味は、次に Mod E で筆者が試訳しておく。

- | | |
|---|---|
| { | a. <u>Where</u> ist thou ? |
| | b. <u>Who</u> has told thee that thou ist naked ? |
| | c. <u>What</u> hast thou done ? |

(22) ドイツ語で

- a. Wo bist du ? GEN. III-9
- b. Wer hat dir gesagt, daß du nackt bist ? GEN. III-11
- c. Was hast du getan ? GEN. IV-10

(23) フランス語で

- a. Qu es-tu ? GEN. 3-9
- b. Qui t'a appris que tu es nu ? GEN. 3-11
- c. Dieu dit : Qu'as-tu fait ? GEN. 4-10

(24) ラテン (俗ラテン) で

- a. Vbi es ? GEN. III-9 (但しVbi=Quo)
- b. Quis enim indicavit tibi quod nudus esses ... ? GEN. III-11
- c. Quid fecisti ? GEN. IV-10

もう一文, Latinで思い出す名作(名画)の題がある——QUO VADIS?だ。英語にするとWhere doest thou go?であるが, このvadereという語は invader とか evade とかで英語に移入されている立派な語なので, 読者も自然に吸収してもらいたい¹²⁾。

そして又, このラテン系のqu-対ゲルマン系のwh-, 即ち [kw] 音対 [hw] 音の対応は, 日頃色々な語例で感応している通りに, よくあることであり, 更には学問的には印欧祖語対ゲルマン語の対応特徴子音の一つの好例なのである——Grimm's Law。



注12) 筆者は約十数年昔, 滞米中の住所が Venice Boulevard と Wade Avenue の交差 (あちらでは地点をそんな風に言って示す) だったので, 英語の wade がラテンの vadereとCognateなのかな? と思って Los Angeles を「足で歩き渡ろう」 (= wade) かと思ったりしたものだった。

と、ここまで、途中で、ドイツ語、フランス語、ラテン語の場合の話に入り込んでいたのだが、そのように疑問詞を関係代名詞に使っているのがフランス語・ラテン語であり、丁度11°初期の Normandy 公 William の英国征服による、英国を大変させた事件のお陰で英語も大影響を受けたが、英語が、本来の指示代名詞系の関係代名詞であったのに、wh-系の語即ち疑問詞を関係代名詞に使うようになってきたのは、この時代の影響であろう¹³⁾。大体、中期英語の末期(14°)からである。

フランス語の影響というと、which に the を冠する the which という言い方もそうかと言われるものである——(16c)に挙例——が、フランス語の lequel を思わせるものがあるからである。例えば次例如きものである。

②6 仏作文試作例

La table sur laquelle est un livre est ancienne.

(=The table on which is a book is old.)

これは仏語ではよく前置詞との結合で使われるようで、英語でも Chaucer や Shakespeare の英語で the which が現れる時、やはり前置詞との結合でと言われたものだが、そうでもあるし、又前置詞なしにも使われている。

こうしてwh-系が使われるようになって来たのであるが、(16a)のように先行詞が人である場合の関係代名詞として whom を使用するとか whos(16b)は段々と出てくるのであるが、whoが仲々現れない——現れるのは16°以後である——が、(16c)のように the which や which が使われる状況にあった。即ち which は先行詞が物の場合でも、人の場合でも使われていたのである。有名な文でのその例を Tyndale 訳(1526)の聖書から挙げよう。

②7 O our father which arte in heven, halowed be thy name;

Matthew VI-9

更に又 which に that を添えた which that が現れる。次例のようなのである。

注 13) OED に 145 *Paston Lett. Suppl* (1901) 35 A letter ... qwych I send yow a copy of 及それ以前に quhylk, quich の記載があるが、興味深い。

(28) He which that hath the shortest shal biginne¹⁴⁾. 'The Prologue' 836

これは Chaucer の英語からの 1 例であるが、このように wh- 語 + that という構成は、英語の長い歴史の中で、ME 期に現われては又 ME 期には廃れて行った？ 珍形である¹⁵⁾。或は OE に在った 'se þe' のような、指示代名詞 se, seo, þæt 類の語に不変化辞 þe を添えた構成への感覚的連想が基になってできていたのかも知れない。

こうして新しい流れで近代に入り、Shakespeare には the which もまだ残っている。次に例を挙げておこう。

(29) a. ... poore Ophelia/Deuided from her selfe, and he fair iudgement./Without the which we are pictures, or meere beafts. *Hamlet* IV. v. 84~6

b. Why one faire daughter and no more, the which he loued pa'sing well. *Hamlet* II. ii. 425

そして新型 wh- 語と旧型 that の競い合い——ルネッサンス期での文語への Latin 化と that 排斥、又 17^o Dryden 他の口語盛り込みで that の盛り返し——の中で、*the Spectator* 紙に「古い家柄の我々が新参の that に地位を奪われて残念だ……」と、who と which からの慎しやかな請願が出され、その話は逆だとか英語史知らずだとか言われてきた¹⁶⁾が、それ程のシーソー・ゲームだったのだ。

そして現代では、承知の通り、who, which の方が、堅い that——いや、かえって現代で使われてゆく中に現代で生まれてきた、あの俗っぽさ

注 14) 拙論 (1987 d), (1993 b) に所載。

15) だから又思い出されるのが拙論 (1987 d) 「COMP→±WH 設定への根拠について」である。

16) C. L. Wrenn (1949) *THE ENGLISH LANGUAGE*. p 125 及その注 参照。
中島文雄註釋 (1965)

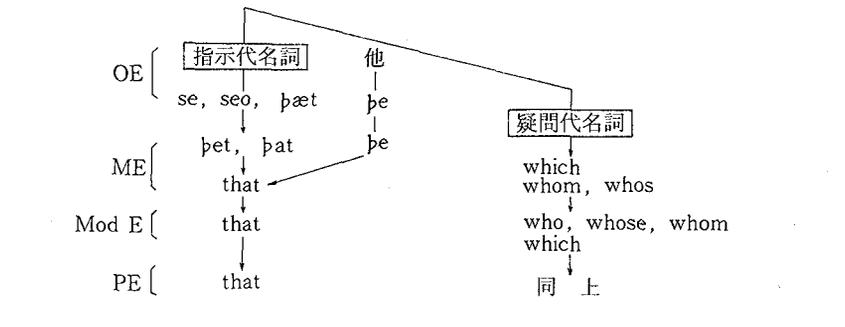
そして、この話、新型と旧型をとり違えた作者 Addison / Steele の物知らず、はよく言われてきたのであるが、そして同書の注にも「Addison が英語史を知らなかったからである」と書いてあるのだが、これは勿論絶対的事実としては当然 that が古いのだが、その当時頃だけで一寸言うと相対的事実としては that が新——劣勢にあったのが勢力を盛り返してきたのだから——しいのだ、新興勢力だ、という

での使い易さをも具えてしまうに至ったのだが¹⁷⁾——よりも、より柔軟で一般並みの感じをももって、しかも who は人に、which は物事に、というしっかりとした区別性までも惹き起して使われているのである。

そして又更に、口語では関係代名詞等は省略しよう——丁度接続詞 that にもその傾向がある通りに——という傾向が盛んであるが、これ又関係代名詞発生の原点——Curme その他によると並列節 (Parataxis) から関係詞節は始った¹⁸⁾——へ戻り着いたのであろうか。更に又、奇しくも、英米人の幼児もその言語獲得過程で、関係詞節形成期には先ず関係詞を使わないで始めて行くという事実報告があるのだ¹⁹⁾。

以上で関係代名詞の話を終る。そしてその長い歴史の流れを鳥瞰図で示しておこう。

図1 関係代名詞の由来



ことを言わんとしたのかもかもしれない、と思ったりする人はいないのか？とも私は
 思ってみたい気持で、このエピソードには初めから心の対処をしていたようだ。

注 17) 人間のことばというものは解らぬものだろう——複雑にして奇怪。だからこそ、
 又ここで今先の *Spectator* 紙上のエピソードへの、或は Addison への弁護の心理へ
 と結びついてゆくのだ。

よく新聞広告に、名画・名筆が連日・連週出るが、あれがかえって凡画・凡筆に
 変ってしまったという心理を楽しむとか憐んだ人は多いだろう。私は何かで、「第
 九」を余り毎年歌うと「第九」も凡曲になると書いたことがある。ことばへの日常
 の心理にもそれがあるのだ。

18) G O Curme (1912) 及び 高津春繁 (1973) 参照。

19) 拙編注 (1993) 参照。

3.3 指示代名詞の流れ

上で、表1の *se*, *seo*, *þæt* を出発点として、そこから一つの流れが *the* なる定冠詞の流れ、又一つの流れが *that* という関係代名詞の流れ、というように二つの大きい流れがあったことを述べた。そしてもう一つの流れが、指示代名詞としての *that* の流れである。

OE では指示代名詞は、男・女・中性と性が分れた指示代名詞であって、それらが具体的には *se*, *seo*, *þæt* という語であり、名詞に冠したり、又それらが単独に使われたりした。その前者が所謂定冠詞であり、後者が所謂指示代名詞又は関係代名詞なのであった。そして、その単独で使われる方では、関係代名詞としての使用例が圧倒的に多く、所謂指示代名詞としての使用例は——読者の皆さんが実際に古典文書を目にしても、いや、一般の皆さん、いやかなり英文学・英語学をやっている人でもおいそれと古典文書を目にすることは出来ないで、せいぜい私が、そういうこともあろうかと、なした編書²⁰⁾があるので、それならかなり早く書店で手に入るだろうが——極めて少ない。

その少ない使用例の中の又二三の例を、拙著²¹⁾所載のものから、ここに挙例してみよう。

(30) a. 7 *gedide ðæt þæs cwearternes ealdor him wearþe swiðe hold. Se him betæhte ealle þa gebundene men ðe --- GEN. XXXX* -21~22

(=and did so that the chief of the prison became very kind.
That (man) handed over all the bound men that---)

b. 7 *nam Sephoram his dohtor to wife. Seo cende him sunu EXOD II* 21~22

(=and took Zipporah his daughter to wife. The wife bore him

注 20) 菅沼 惇 (1990) 『GENESIS IN 4 VERSIONS——OE, ME等への入門として——』大阪教育図書。

21) 拙著 (1993) 『OLD ENGLISH HEPTATEUCHの言語研究』香川大学教育学部研究叢書3のⅡ。4.2より。

a son)

c. 7 God me sende ---, 7 þæt ge habbon þæt ge magon big
libban. Ðæt næs na eowres þances ac þurh God, þe ---
GEN. XLV₋₇₋₈

(=And God sent me---, and so that you have what you may
live on. That was not through your favour bur through God,
that---)

最後例 c. では Ðæt の前の文の出来事を受けて使われている Ðæt である。文例 b. は非常に難しそうな語もなく、短文でよく解る文例である。

そのように男・女・中性の3性でそれぞれに使用されていた指示代名詞が、ME期にはその中の‘þæt’だけが、þat, that の形となって使われるようになってしまったのである——人の世、ことばの世界も、とにかく「選ばれる」ことの多さよ！

ただ単にそのように性の相異として、中性の指示代名詞であった þæt なのだが、それが現代において使われている that になってしまうのであるが、その関りについては、やはりもう一つの指示代名詞 this との係りにおいて眺めなくてはならない。

そのことについては又章を別にして、次章でとり扱うのがよい。

4. 指示代名詞二種

OE 期に指示代名詞はもう一種類あった——「これ」「この」の意味をもつ、これ又男・女・中性それぞれの þes, þeos, þis 類である。これ又丁度この最後の中性の‘þis’が現代綴りにしてみると、‘this’であって解り易いであろう。

4.1 this と that

that については今まで上でずっと見てきたので、先ずこゝでは this が OE 期からどのように使われていたかを見よう²²⁾。

注 22) これら ③1)~③3) に掲げる諸例も又全て、拙著 (1993) II. 4.1 より転載である。

- (31) a. Ðes byð²³⁾ reðe mann, GEN. XM-12
 (=This shall be a wild man,)
 b. Ðis is nu ban of minum banum GEN. II-23 (意味は(3 a)をみよ。)
- (32) a. Eala hu egeslic ðeos stow ys! GEN. XXVIII-17
 (=Alas, how awful this place is !)
 b. Ðisne man me sealde Drihten. GEN. IV-1 ((3 b)に意味はある。)
 c. Ic sille þe þis land GEN. XLV III-4
 (=and I will give thee this land)
- (33) a. Tell þas steorran, gyf ðu mæge ; GEN. XV-5 ((3 d)に意味あり。)
 b. Ðas synd Noes cneornysa : GEN. VI-9

このように、OEにおいては、男・女・中の3性で、必要に応じて諸格形をとりながら、この指示代名詞は、上例でしっかと理解できる通りに使われていたのである。その最初の出発点の姿を表にまとめておこう。

表 2

格 \ 性	sgl			l
	m	f	n	全 性
nom.	þes	þeos	þis	þas
acc.	þisne	þas	þis	þas
gen.	þises	þisse	þises	þissa/ þisra
dat.	þisum	{ þisse þisre þissere }	þisum	þisum

この表を見てよく判る通りに、Mod E 形 'this' の形が一貫しているのが中性の場合であり、更に又他の性の場合にも、又複数形の場合にも、その形態

23) この byð は beon (=be) の 3rd pers. pres 形：即ち beon^{+eð} → (beoēð) → byð 菅沼仮説。(同様に beon^{+að} → (beoað) → beoð) 尚この文脈は Abram の妻 Sarai が石女(うまず女)なので、侍女 Hagar を与え、孕んだ時、天使が言った言葉なので、近い将来生れる時のことなので、shall be としてある。

がちゃんと含まれており、「人は力」であったように「ことばも力」であったわけで、その形が優勢になって、ME 期には非常に単純化されて次例のように全て‘this’形になってしまい、そしてそれが現代に残っているのである。

- (34) a. This schal be a wielde man ; GEN. XVI₋₁₂ (後版)
 b. This is now a boon of my boonys, GEN. II₋₂₃ (後版)
- (35) a. How feerful is this place ! GEN. XXVIII₋₁₇ (前版)
 b. ²⁴⁾I have had a man bi God. GEN. V₋₁ (前版)
 c. and Y shal 3yue to thee this loond, GEN. XLVIII₋₄ (前版)
- (36) a. and noumbre the sterrys, if thow mayst. GEN. XV₋₅ (前版)
 b. Thes²⁵⁾ ben the generaciouns of Noe. GEN. VI₋₉ (前版)

そのように、古期英語時代においては、文法性の一つである中性の指示代名詞として使われていた‘þæt’であったのだが、その‘that’が、もう一つの種類の指示代名詞であった‘pis’由来の‘this’と、現代行なわれているような対照関係において感じられ、使われるようになったのは中期英語時代以降だとされている²⁶⁾。

注 24) これは OE 版の対応箇所 (32 b) とは別表現となっていて、指示代名詞が付いていない。原典の VL 版をそのまま移植したのだろう。

VL 版 : Possedi hominem per Deum

25) Wycliffe 版の後版では These 使用である。

26) これは Mustanoja, T. F. (1960) を参考に行っているが、その原文を——今後の研究の為の又ビーコンとして^{※1)}——次に引用しておく。that と this の対照的に使用された好例は筆者が下線を引いている。なお OE での例まで注記として挙がっている。

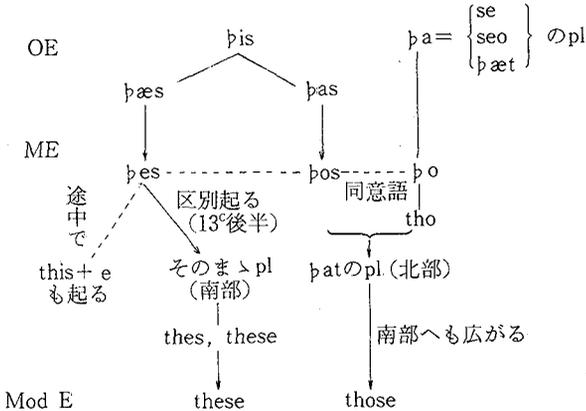
DEFINING AND DEMONSTRATIVE USES. —On the whole, the OE use of independent *se, seo, þæt* coincides with ME and Mod. E usage, but the dependent use of this pronoun is defining rather than demonstrative in character and corresponds roughly to that of the definite article. This usage survives in some ME expressions, especially before proper names:— *that Diane his dowhter* (Gower CA v 1249);— *the aungeles songen that joyful songe 'Gloria in Excelsis'* (Love, Bonavent Mirr 50 ; NED)²⁾. About the beginning of the 13th century there are signs of *that* assuming a more definitely demonstrative character and being implicitly or even explicitly opposed to *this*. — *þe Laferrd haffde litell rum Inn all þatt miccle riche* (Orm. 2490); — *ich wille telle þat cas* (RGlouc. 205); — *þat tre was ded, þis sal be lijf* (Cursor 8502, Cotton MS)¹⁾.

4.2 these 対 those

現代英語では this の複数形は these であり, that の複数形は those である。英語の出発点即ち OE では, this の複数形は þas 等々(表 2.) であり, that の複数形は þa 等々(表 1.) であった。

さて, それらの原点—— þas 対 þa ——から, その後どんな過程を経て現代の these 対 those へととなってきたのであろうか? その事情については OED が詳しい²⁷⁾ ようなので, それを私が概略伝え又平行して図示してみよう。

図 2



¹ Sporadic instances of the dependent *that* with a clearly demonstrative meaning opposed to 'this' occur even in late OE texts : — *þis leoht we habbaþ wiþ nytenu gemæne, ac þæt leoht we sceolan secan þæt we moten habban mid englum gemæne* (Blickling Hom. 21) Cf. O. Johnsen, *E Studien* XLVI, 1912–13, 6–7.

※) ただのそれだけ——*that* が「あれ」, *this* が「これ」と対照的に使われている現象を見付けること——でも, 人間遭遇することが難しいのである, 少し古くは, ね, 今だったらありますよ。今後は私もなるべく気に留めて置いて蒐めるようにしようと思う。

注 27) 勿論これとて, 中尾俊夫 (1972) 『英語史Ⅱ』 p 142 も指摘しているように, 欠点を持っているようでもあるが, 又今後——誰がやってもよいのであるが, ただ大変な時間と骨折りを要する——の研究の為にここにその時の為のビーコンを灯しても置く。

OEDより, *These* (ðīz), *dem. pron and adj. (plural)*. Forms : see below [This word has a complicated history. The OE pl. of *ðes*, *ðeos*, *ðis*, was

即ち, OE þis の pl. 形は þas 及び比較的少数だが þæs があり, それ等は, 当然の音変化で, ME で os, es となった。þes は, やはり何と言っても 'þ-is' 系の感じの語で, 南部でそのまま pl. 形に安定した——その間一方 is に形容詞の pl. 屈折語尾 -e を付けた is-e²⁸⁾ も起る——が, 一方 þos の方は, þo (OE se, seo, þæt の pl. 形 þa 由来) と同意語だと感じられてしまっ, 北部で þat の pl. 形になってしま, 南部へも広がった, という程のことである。

その þo 乃至は tho については Wycliffite 版聖書によく現れるので, 実例を挙げておく。

ðās, less commonly ðǣs (:—O Teut *þai-se, -si), dat ðiosum, ðis(s)um, gen. ðissa, ðisra. The form ðās remained in ME as þās, which was duly retained in the north, and by regular phonetic development became þōs in midland and south. The OE ðǣs gave ME, þǣs, þēs, þeos, and their local variants, including s.w. þūs. A frequent form of þēs from the 12th to the 16th c. was þis, identical with the sing.: see γ below. The two forms þēs and þās became differentiated in use after 1250—1300, þēs and its variants remaining in the south as plural of THIS, while þās became synonymous with þā, the plural of se, seo, þæt, THAT. This was prob. due to assimilation, þēs, þis, etc. being more like the singular and the dat. and gen. pl., while þās was in vowel like þat and þā. Apparently the assumption of þās as pl. of þat began in the north, and slowly spread to the south in the form þōs: see THOSE. But from the 12th c. there was evidently a tendency in the midl. dialects to differentiate the plural of this by adding -e, as in the plural of adjs (al, alle, sum, sume, his, hise, etc.), so that from c. 1200 to 1500 a frequent midland form was þis-e (2 syllables in Ormin, etc.); in e. midl. also þese appears c. 1200. Even the s.w. þūs varied with þūse. Of all these varieties, these was the survivor. Also, of thō and thōs, the two plurals of that, the former was finally dropped in the course of the 16th c.; so that there now remain in standard English only the two forms these and those (thoos, thōs) —both in their origin plurals of this; the original plural of that being lost in standard English, though in Scotland and the northern counties of England it survives dialectally as thae, theā, theeā: see THAE. In the same district these has been superseded by THIR (thur, thor) (The original pl. þās, þōs is treated under THOSE, to which it belongs in form, though in meaning it belongs here.)]

注28) Chaucerにも見られる——既出拙論(1993b) III 3. 指示代名詞の項にもその記述あり:

But with thise relics, whan that he fond
A povre person dwelling upon lond,
Upon a day he gat him more moneye
Than that the person gat in monthes tweye.
(The Prologue 701~704)

(彼(免罪符売り)は, 地方で貧しい牧師を見つけては, こんな聖骨を売って, 一日でその牧師の二ヶ月分以上もの金を儲けていた。—拙訳)

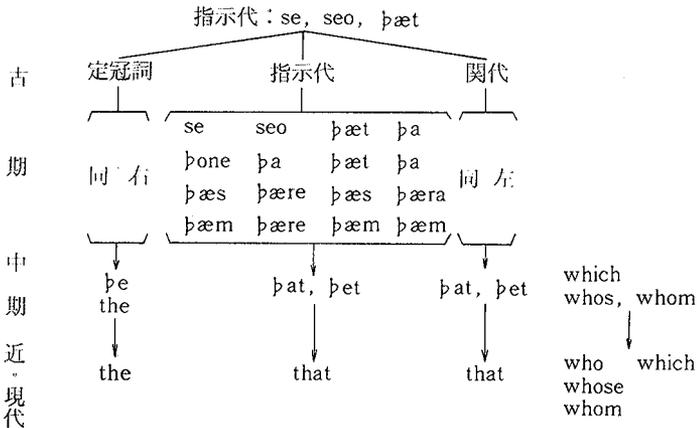
- (37)²⁹⁾ a. and God made steris; and settide tho in the firmament of heuene, *GEN*. I -16~17
- b. God seiz alle thingis which he made, and tho weren ful goode. *GEN*. I -31

OED も a complicated history だと言っている通り、とても複雑な物語が、この this と that の複数形にはあったのである。又一寸簡単に言ってしまうと、これ又誤解の歴史であったことにもなる。

おわりに

定冠詞・指示代名詞・関係代名詞は一つのルート（One Root）から、三つの大きなルート（Three Routes）で、流れ降りて来ているのだ。

図3



29) 既出拙編(1990)に所蔵。尚 steris=stars, seiz=sawであるが、その他で綴りが少し変な語は自然に判読してもらいたい。

引用文献

- Biblioteca de Autores Cristianos ed 1982. *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Clementiam*. Mateo Inurria, Madrid.
- Crawford, S. J. ed 1922. *The Old English Version of The Heptateuch* OUP.
- Deutsche Bibelstiftung. 1967. *DIE BIBEL od. DIE GANZE HEILIGE SCHRIFT DES ALTEN UND NEUEN TESTAMENTS NACH DER ÜBERSETZUNG MARTIN LUTHERS* Stuttgart.
- Murray, J. A. H. et al eds 1970. *The Oxford English Dictionary* Oxford
- Mustanoja, T. F. 1985. *A Middle English Syntax*. Part I. 東京：名著普及会。
- Skeat, W. W. ed 1963. *The Canterbury Tales, THE COMPLETE WORKS OF GEOFFREY CHAUCER* Oxford : Clarendon Press.
- 菅沼 惇. 1978 d. 「COMP →± WH 設定への根拠について」香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部 第71号。
- 編. 1989. 『GENESIS IN 4 VERSIONS —— OE, ME 等への入門として』大阪：大阪教育図書。
- . 1993. 『OLD ENGLISH HEPTATEUCH の言語研究』香川大学教育学部研究叢書 3。
- Societe Biblique de Geneve : *LA SAINTE BIBLE*. La Maison de la Bible, Paris.
- Thorpe, B. ed. 1861. *THE ANGLO-SAXON CHRONICLE, ACCORDING TO THE SEVERAL ORIGINAL AUTHORITIES VOL. I* LONDON; LONGMAN, GREEN, LONGMAN, AND ROBERTS

参照文献

- 荒木一雄・宇賀治正朋. 1984. 『英語史ⅢA』「英語学大系10」東京：大修館。
- 市河三喜編注. 1952. *The Prologue* 東京：研究社。
- A Cruttenden (1979^a) } *LANGUAGE IN INFANCY AND CHILDHOOD*——A
菅沼 惇編注 (1993) } *Linguistic Introduction to Language Acquisition*. 大阪：
大阪教育図書。
- Curme, G. O. 1912. 'A History of The English Relative Pronoun' *JEGP*. XI
- 中尾俊夫. 1972. 『英語史Ⅱ』「英語学大系9」東京：大修館。
- 中島文雄. 1965. 『英語発達史』東京：岩波書店。
- Murray, J. A. H. et al eds 1970 上掲辞書。
- 菅沼 惇. 1993 a. 「ME 所有格の使用傾向——屈折形と of 句—— Wycliffite GENESIS の場合」香川大学教育学部 研究報告 第Ⅰ部 第87号。
- 菅沼 惇. 1993 b. 「Chaucer の言語研究—— The Prologue ——英語の史的発達——」香川大学教育学部 研究報告 第Ⅰ部 第88号。
- 菅沼 惇. 1993 c. 「Shakespeare の言語研究—— *Hamlet* in Q₂ ——英語の史的発達

——」香川大学教育学部 研究報告 第 I 部 第89号。

高津春繁. 1973『印欧語比較文法』東京：岩波書店。

Thorpe, B ed. 1861 上掲書 VOL. II. (Translation).